View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by UTokyo Repository

UTokyo Repository
東京大学学術機関リポジトリ

批判的教育学におけるパウロ・フレイレの受容 : ジルー，アップル，マクラーレンの場合

その他のタイトル	The Influence of Paulo Freire on Critical Pedagogy : In case of Henry Giroux, Michael Apple, and Peter McLaren
著者	植松 千喜
ページ	389-399
発行年	2020-03-30
URL	http://doi.org/10.15083/00079214

批判的教育学におけるパウロ・フレイレの受容

―ジルー，アップル，マクラーレンの場合―

教職開発コース　　植　松　千　喜

The Influence of Paulo Freire on Critical Pedagogy
–In case of Henry Giroux, Michael Apple, and Peter McLaren–

Kazuki UEMATSU

The purpose of this study is to examine the influence of Paulo Freire on distinguished scholars of critical pedagogy, such as Henry A. Giroux, Michael W. Apple, and Peter L. McLaren. The main findings are as follows: (1) All the three scholars supported Freire's utopian view of society. His view was fundamental to a movement toward social justice. (2) Giroux appreciated that Freire offered not only "the language of critique" but also "the language of possibility", and he proposed border pedagogy. It is necessary to close the gap between the real teachers and "transformative intellectuals" or "border crossers". (3) Apple stressed that not only Freire contributed to educational theory by writing articles or books but also he engaged in practice. Apple suggested decentered unity, so it is necessary to examine more practices in schools, communities, unions and so on. (4) McLaren focused particularly on class in Freire's thought and he aimed for a revolution. However, Freire insisted that multiple differences must have been considered in his later years, so it doesn't seem to be advanced from Freire's original theory.

目　　次

１．序論
２．３人のプロフィール
　Ａ　ヘンリー・ジルー
　Ｂ　マイケル・アップル
　Ｃ　ピーター・マクラーレン
３．ヘンリー・ジルーのフレイレ受容
４．マイケル・アップルのフレイレ受容
５．ピーター・マクラーレンのフレイレ受容
６．おわりに―３人のフレイレ受容のまとめと可能性，今後の課題

１．序論

本稿の目的は，北米の批判的教育学と呼ばれる研究分野において，代表的な理論家たちの中でパウロ・フレイレ（Paulo Freire）がどのように受容されてきたかを明らかにすることである。

批判的教育学とは，1970年代以降アメリカ合衆国で展開されてきた，ネオ・マルクス主義の系譜に連なる一連の教育研究を指す。ここでいう「批判的」とは，教育における権力の問題や社会的不平等・不公正の問題に対する批判を意味する。澤田稔は，米国のカリキュラム史研究者ハーバート・クリーバード（Herbert M. Kliebard）が米国教育史から帰納的に導き出した，カリキュラム編成論上の４つの立場をそれぞれ現代の文脈で再解釈して次のように整理している。すなわち，第１の立場は伝統的な文化遺産や既存の学問的成果を次の世代へ継承させようとする保守主義的な立場，第２の立場は各発達段階の固有性を重視し子どもの主体性を尊重する子ども中心主義的立場，第３の立場は学校で学んだことが実社会で役立つようにカリキュラムを構成しようとする社会効率主義的立場，第４の立場はより公正な社会の実現のために，階級・人種・ジェンダーなどをめぐる不平等の是正や，社会的に不利な条件を抱える人々のエンパワーメントに寄与しうるカリキュラム編成をしようとする社会改良主義的立場という。このうち，本稿で検討の対象とする批判的教育学は第４の立場に位置するカリキュラム編成論であるということになる[1)]。

この批判的教育学において，重要な拠り所として頻繁に参照されるのがブラジルの成人識字教育者であったパウロ・フレイレ（Paulo Freire, 1921–1997）である。フレイレは実践者でありながらも，自身の実践をもと

にした教育思想家として，批判的教育学の分野に限らず世界中で名が広く知られている。1960年代初めにレシフェ市での識字教育運動に携わったのを皮切りに，63年にはブラジル全国での識字教育プログラムを指揮するまでになったが，64年の軍事クーデターによりボリビア，そしてチリへの亡命を余儀なくされた。その後米国ハーバード大学に招聘されたことを契機に，70 年に英語版の『被抑圧者の教育学（Pedagogy of the Oppressed）』が出版され，世界中で広く読まれることとなった。80年代にブラジルに帰国した後はサンパウロ市の教育長官としても活躍した[2)]。彼の「銀行型教育」批判や「対話」と「意識化」を軸にした識字教育実践は，世界の教育実践者に広く受け入れられ，大きな影響を与えてきた。日本国内でも『被抑圧者の教育学』は古くから邦訳されているほか，里見実による紹介や翻訳が行われ[3)]，彼の理論的・実践的影響を受けた著作は枚挙に暇がない。

しかしながら，批判的教育学においてフレイレが重要な参照点で，ある種の前提であったために，フレイレがそれぞれの論者においてどのように受容されたのかについては，ヘンリー・ジルー（Henry A. Giroux）に関するものを除いて必ずしも具体的に検討されてこなかったように見える。ジルーとフレイレの関係を扱ったものとしては，松岡靖による「対話のペダゴジー」の受容に焦点を当てた研究[4)]や，ジルーの境界教育学におけるフレイレの再構成を差異の位置づけに着目して明らかにした竹川慎哉の研究[5)]が挙げられる。拙稿ではこれらの先行研究に拠りつつ，近年のジルーにおいてはフレイレ言及が乏しいことを指摘した[6)]。

日本において批判的教育学の研究動向そのものについてまとめた主要な先行研究としては，まず先にも挙げた澤田がジルーとマイケル・アップル（Michael W. Apple）に関して，２人の論を比較する形で検討しているほか[7)]，安彦忠彦とともに初期のアップルの研究がカリキュラム研究の中でどのように位置づけられるかを示したものが存在する[8)]。しかしやはりこれらの研究の中でも，フレイレの受容そのものについての記述は極めて限定的である。

これらを踏まえて本稿では，批判的教育学の代表的な理論家であるジルー，アップル，そしてピーター・マクラーレン（Peter L. McLaren）の３人を対象に，出版されている著作をもとにそれぞれのフレイレ受容を明らかにする。まず批判的教育学の論者として，ジルーとアップルを取り上げることは日本国内のこれまでの批判的教育学研究で頻繁に言及されてきたこと，そして被引用数という客観的な指標からもそれほど恣意的なものではないといえるだろう。他方でマクラーレンは被引用数などの指標で及ばないだけでなく，日本国内でも他の２人と比べて言及が少なく，2019年現在著書の邦訳もなされていない。しかしながら，現在マクラーレンはチャップマン大学でフレイレ・アーカイブ・コレクションを組織しており，フレイレの論文や遺品などをこのアーカイブに寄付するなど，他の２人とは異なる重要な役割を果たしている。また他の２人と異なり，フレイレの名を冠した著作を著者や編者として上梓してきた。このことに鑑みて，マクラーレンをもう１人の検討対象とすることにした。

無論，フレイレを受容した批判的教育学の論者が彼らに限られるわけではなく，例えばフレイレの２番目の妻にあたるニタ・フレイレ(Ana Maria Araújo (Nita) Freire）とともにフレイレの死後も著作を発表しているドナルド・マセド（Donaldo Macedo）や，フレイレとイタリアの政治思想家アントニオ・グラムシ（Antonio Gramsci）に依拠し批判的教育学に近い立場の成人教育論を示したピーター・メイヨー（Peter Mayo）などがフレイレ受容の検討を要する人物として挙げられる。しかしながら紙幅の都合から，本稿では日本国内で主として参照されてきたこの３人に焦点を当てることとした。また，検討にあたっては３人のこれまでの研究の変遷の概略を文脈として踏まえることになるが，これについても本稿ではフレイレ受容と関わる形でのみの言及とした。

以降の節では，まず２節において３人の簡潔なプロフィールを日本国内での先行研究を射程に入れながら概観する。次に３節～５節において，ジルー，アップル，マクラーレンそれぞれのフレイレ受容について明らかにする。最後に６節において，本稿で明らかになった３人のフレイレ受容の共通点とそれぞれのバリエーションを示し，今後の展開可能性や課題について論じて稿を結ぶ。

２．３人のプロフィール

A　ヘンリー・ジルー

ヘンリー・ジルーは，1943年にアメリカのロードアイランド州プロビデンスに，フランス系カナダ人の労働者階級移民の子として生まれた。彼は68年から75年まで同州のバーリントンにて，高校教師として社会科を教えていた。この間に並行して大学院に入学し，

75年にフレイレの『被抑圧者の教育学』との出会いを経ている。77年にカーネギーメロン大学で博士号を取得し，同年から83年までボストン大学で教授を務めた。81年に初期の代表著作である『イデオロギー，文化，学校教育のプロセス（*Ideology, Culture, and the Process of Schooling*）』を発表した。その後 83 年にマイアミ大学に移り，『教育における理論と抵抗（*Theory and Resistance in Education*）』を発表した。このマイアミ大学時代に，後に検討するマクラーレンと同僚として働くことになる。92年から2004年までの間ペンシルヴァニア州立大学に勤務し，この頃から大衆文化研究を始めているほか，米国の戦争やテロリズムの問題についても論を展開している。04年から15年までの間はカナダのマクマスター大学の教授を務めた[9]。2019年現在も，精力的に著作を発表し続けている。

日本では，邦訳されている著作は『変革的知識人としての教師（*Teachers as Intellectuals*）』に限られるものの，現在に至るまで継続して研究がなされてきた[10]。

B　マイケル・アップル

マイケル・アップルは，1942年にアメリカのニュージャージー州パターソンのユダヤ人労働者階級の家に生まれ，トラック運転手や軍隊での教師などをして働きながら夜間大学に通い，19歳にして有色人種が多く住む地域の複数の小学校の常勤の代替教員として働いた。それは単なる偶然ではなく，アップルはパターソンにおいて，アフリカ系アメリカ人とラテンアメリカ系住人のコミュニティで精力的に活動していたことがあり，人種隔離廃止運動や識字活動などの政治活動に若い頃から多く従事していた。彼が小学校教師をしていた期間は，ケネディ政権からジョンソン政権の時期と重なり，この間に実践者として子どもたちと向き合う最前線にいたアップルは，初期の彼の仕事として知られる自由主義政策批判へと導かれることになった[11]。70年にコロンビア大学大学院ティーチャーズカレッジから博士号を授与され，それ以来ウィスコンシン大学マジソン校で教鞭を取ってきた。

日本ではアップルの著作は『イデオロギーとカリキュラム（*Ideology and Curriculum*，邦題：学校幻想とカリキュラム）』や『教育と権力（*Education and Power*）』を始めとして80年代から継続的に邦訳され出版されているほか，ジェームズ・ビーン（James A. Beane）と共に進歩主義的実践を集めた『デモクラティック・スクール（*Democratic Schools*）』も邦訳されている。また，日本のカリキュラム研究者とアップルらが共同で編集にあたったものもいくつか存在しており，本稿で取り上げる 3 人の中では一番日本語の情報にアクセスしやすい論者であるといえるだろう。

C　ピーター・マクラーレン

ピーター・マクラーレンは，1948年にカナダのオンタリオ州トロントの労働者階級の家に生まれた。74年から79年の間，マクラーレンは小・中学校の教師として，トロントのジェーンフィンチ回廊と呼ばれるカナダ最大の公営住宅地の学校で最も長い時間を過ごした。この時期の経験を記述した『回廊からの叫び（*Cries from the Corridor*）』は80年にカナダのベストセラー10冊にランクインしている。この本をマクラーレンは後に自己批判しており，これを教育学的に書き直したものが彼の代表作である『学校での暮らし（*Life in Schools*）』であった。83年にトロント大学から博士号を授与された後に米国へ移住し，85年から2013年までの間カリフォルニア大学ロサンゼルス校で教鞭をとった。13年以降はチャップマン大学に勤めており，現在に至る。このチャップマン大学ではフレイレ・アーカイブ・コレクションを組織しており，マクラーレンはフレイレの論文や遺品などをこのアーカイブに寄付するなど，重要な役割を果たしている[12]。

マクラーレンの著作そのものは現在まで邦訳がなされておらず，いくつかのチャプターが翻訳されているのみである。しかしながら，田中智志の論考[13] を始めとしてポストモダニズムの流れを組む批判的教育学者として，ジルーと並んで言及されてきている。

3　ヘンリー・ジルーのフレイレ受容

元々高校での社会科教師をしていたジルーは，1980年代から解放のための教育理論を展開した。その背景の 1 つには，70年代までの「新しい教育社会学」の流れの中で，学校そのものを問う視点の教育社会学研究によって，社会経済的背景や資本主義と学校教育の関係が明らかになっていったことが挙げられる。さらに経済学の分野では，アメリカの経済学者サミュエル・ボウルズ（Samuel Bowles）とハーバート・ギンタス（Herbert Gintis）の著作『アメリカ資本主義と学校教育（*Schooling and Capitalist America*）』によって，学校教育制度と経済制度の間に密接な関連があることが示された。つまり，学校における人間関係や生

徒の学習のあり方が資本主義社会の構造に対応しているという「対応原理（correspondence principle）」を唱えたのである[14]。これらの研究を通して，当時一般にリベラル派が信じていたように学校教育は社会の平等化を促進していたのではなく，むしろ社会の不平等再生産に寄与していたということが明らかにされた。

ジルーはこのボウルズおよびギンタスの対応理論を，1981年の『イデオロギー，文化，学校教育のプロセス』の中で次のような理由で肯定的に評価している。第１に，社会経済的な背景が学校教育を分析するにあたって，欠くことの出来ないものであることを指摘したことである。第２に，対応理論が学校教育の階級分析により，教育の失敗に対する批判の対象を，教師や生徒個人から支配的な社会の構造的な力学へと移したことである。これらにより対応理論は，資本主義と学校教育の間の関係性に対する理解を深めるような理論的貢献をした。

しかしジルーは決して対応理論を支持したわけではなかった。ジルーだけでなくさまざまな論者が，対応理論に対する批判を展開してきた。例えば，過度に決定論的な因果関係モデルであること，人間を受動的な存在として見る見方，政治的な悲観論，そして職場と学校を特徴づける矛盾や緊張の強調に失敗していることなどが挙げられている。ジルーは学校教育が社会的な不平等の再生産に寄与していることを認めつつも，ポール・ウィリス(Paul Willis）の『ハマータウンの野郎ども（*Learning to Labour*）』の研究のように，その文化の生産過程に含まれる相対的な自律性に着目する。ここにジルーは抵抗の可能性を見出し，対応理論を乗り越えるような変革的実践を目指す「抵抗理論」を紡いでいったのである。

彼が抵抗理論を紡ぐにあたって着目し，大きな拠り所としたのがフレイレの解放教育学であった。81年当時，フレイレはまだアメリカの一部のラディカル派やリベラル派にしか知られておらず，かつしっかりとした理解や正しい応用が必ずしもなされていなかったと彼はいう。ジルーはこの本の中でフレイレが教育や知識を政治的なものとみなし，省察と行動を形作る基礎として対話的関係を重視していることなどについて示している。[15]。続く87年の『包囲される教育（*Education under siege*）』はフレイレに捧げる本という形を取っているが，学校は批判的市民を育てるための公共領域であると考える者としてジョン・デューイ（John Dewey）やグラムシと一緒に挙げられ，同じくフレイレの教育を政治的なものとして見る見方や対話的な関係について触れられている[16]。

ジルーは 88 年の『変革的知識人としての教師（*Teachers as Intellectuals*）』の中で，彼自身がそれまで「批判の言語（language of critique）」と呼んできたものと，「可能性の言語（language of possibility）」と呼んできたものとを結びつけたことに，フレイレの功績があると評価している[17]。「新しい教育社会学」やボウルズおよびギンタスの対応理論は，学校が実際には社会的・経済的・文化的再生産の主体であることを理論的にも経験科学的にも証明している点で「批判の言語」を提供していると言える。しかしながらこれらは，学校を本質的に再生産の場とみなしてしまい，対抗ヘゲモニー的な実践を創り出すような言説，すなわち「可能性の言語」を提供出来ていなかった。その結果，「批判の言語」が希望的な見通しを全く提供出来ないために，絶望の言説へと組み込まれてしまうこととなってしまう[18]。これらに対しフレイレの業績は，一方では主体と構造との関係を架橋し，歴史的実践または現在の実践の中で築かれた制約の中に人間の行動を位置づけることで「批判の言語」を提供しながら，他方で同時に社会的闘争に向けた可能性を呼び起こすような抵抗の形態や余地などを指摘することで「可能性の言語」をも提供していた。

しかしジルーはフレイレの理論をそのまま継承したわけではなく，ジルーが生きる北米の社会現実に照らして再構成をしようとした。特に，フェミニズムの立場からフレイレに向けられた批判を視野に入れることがポイントであった[19]。

エリザベス・エルスワース（Elizabeth Ellsworth）はクリティカル・ペダゴジーにおける「エンパワメント（empowerment）」「生徒の声（student voice）」「対話（dialogue）」さらには「批判的(critical)」などの概念が，実際の教室で実践を行う場合に，かえって支配関係を維持する抑圧的な言説になっているのではないかという問題を自身の授業実践の経験から提起している[20]。また，フレイレやジルーの理論枠組みでは，ある差別を問題とすることで，他の差別が問われなくなってしまうことが起きてしまうとする。すなわち，抑圧者と被抑圧者という概念は絶対的なものではなく，ある場面において被抑圧者である者が，他の場面では反対に抑圧者となりうることを示唆している。

これらのフレイレに向けられた批判を視野に入れつつ，ジルーは「抵抗理論」からさらに理論を発展させ，差異の政治という観点から再構成し，これを「境界教育学（border pedagogy）」と名付けた。「境界（border）」

とは，「歴史や権力や差異の言語を構造化してきた認識論的・政治的・文化的・社会的な枠を示す」概念のことである。例としては，民族や人種，階級やジェンダーなどがこの境界にあたる。この境界概念は，「越境（border crossing）」という形として文化的批評と教育の過程を示唆するという。すなわち，支配の中で作りだされた既存の境界が，乗り越える形によって挑戦され再定義されうるものとして示されている[21]。ジルーはこの境界概念の導入により，多種多様な差異に注目し尊重することを可能にしようとしたのである。

この理論を示した著作『越境（*Border Crossings*）』（初版92年，２版05年）の中にはカルロス・アルベルト・トレス（Carlos Alberto Torres）を聞き手とするインタビューが収録されており，ジルーが高校教師時代にフレイレを読んだことで，その当時の張り裂けそうな自分の感情を表現する言葉を発見した衝撃などが語られている。ジルーはクリティカル・ペダゴジーはフレイレとともにあると考えており，特に次の３点の意義が重要であると述べている。すなわち，第１にフレイレがより広い知識人のあり方の好例となったこと，第２に社会的公正のための政治と闘争の行為として理論と実践の間の関係を蘇らせたこと，第３にコミットメントとは何かという感覚を提供したことであるという[22]。

第１の意義はやや難解であるが，これは94年の『不穏な快楽（*Disturbing Pleasures*）』の中でより具体的に論じられている。以下にその概略を示すと，生涯を通じてフレイレは亡命生活などでどこか１ヶ所に拠点を構えて活動をするということがなく，世界中の地域をまたがる形で権力や希望の問題に関与してきた。このようなフレイレのあり方をジルーは，自らの境界教育学の枠組みにおいてまさに境界横断的な存在として捉えており，変革的知識人の１つのモデルとして評価している[23]。

ジルーは80年代以降，日本で盛んに研究されていた90年代～00年代はもちろんのこと，今日に至るまでコンスタントかつ精力的に著作を発表し続けている。そしてこれらの著作の中では少なからずフレイレが言及されていた。ただし近年の著作においては，フレイレへの言及が全くないものもしばしば見られるようになった。これはジルー自身が大衆文化研究，イラク戦争批判，高等教育政策を含めた米国の若者政策への批判などへと舞台を移していったことで，教育学そのものを新しく論じる機会が少なくなっているためであると考えられる。また，フレイレへの言及がある場合でも，『被抑圧者の教育学』の一節のみを参照している場合や，スチュアート・ホール（Stuart Hall）やデューイらとともに民主主義と教育を結びつけた論者として名前が列挙されるにとどまるなど，言及の分量はかなり限られている。さらに，80年代・90年代のようにフレイレに依拠して実質的に新しい論を述べているものや，フレイレについて１章分全てを割いて扱っているものなどはほぼ皆無である[24]。

４　マイケル・アップルのフレイレ受容

アップルはジルーより研究者としてのキャリアの始まりが早く，学校における権力関係やカリキュラムをめぐるポリティクスに対する批判的分析を主な仕事としていた。教員組合のリーダーを務めた経験もあり，教育研究者としてだけでなく反体制活動家としての性格も色濃い。

78年に出版された『イデオロギーとカリキュラム』は，学校における知識がいかにイデオロギーと結びついた政治的なものであるかをグラムシのヘゲモニー論に基礎をおいて論じている[25]。この『イデオロギーとカリキュラム』をさらに精緻に発展させたものが，続く82年の『教育と権力』である[26]。これらの著作を通じてアップルは，社会的再生産論やグラムシのヘゲモニー論などに基づいて，学校の知識がイデオロギーを含むものであることを隠蔽し，当時のリベラル派が持つ学校を素朴に民衆を解放するものとする神話を鋭く批判した。さらにマルクス主義に一定程度依拠しながらも，下部構造決定論に陥ることなく，また同時に国家のイデオロギーをそのまま学校の生徒たちが映し出しているという論も認めず，文化や教育の相対的自律のプロセスという観点から学校を具体的に分析しようとしていた[27]。これらの研究にみられるカリキュラム観は，教育とは常に政治的なものであるというフレイレの立場とも大いに重なるものであるが，まだこの当時はフレイレが直接論の中に現れるには至っていない[28]。

風向きが変わるのは，86年の『教師と教科書（*Teachers and Texts*）』である。この著作は前の２作と異なり，読者を研究者だけでなく現場で働く教師たちも含めて想定している。この著作はタイトル通り，教師に対する分析と教科書に対する分析の２本立てで構成されている。この『教師と教科書』の結論部である最終章において，アップルの主要著作の中でフレイレの名が初めて登場している[29]。この著作の頃から

アップルは80年代のレーガノミックスの状況を踏まえ，保守復権に対する批判を行っているが，この結論部において米国の批判的リテラシー教育研究者・実践者のアイラ・ショア（Ira Shor）とともに，社会を変えようとしている個人の実践者としてフレイレは例示されている。

93年の『オフィシャル・ノレッジ（*Official Knowledge*）』はそのサブタイトルに含まれている通り，『教師と教科書』よりさらに明白に保守復権に対する批判的分析を行っている。特に右派勢力がどのように力を伸ばしたのかについて，グラムシを理論枠組みとした「常識」の変化に関して論じたものや，米国社会を取り巻く権威主義的ポピュリズムに対する批判的分析が特徴的である。フレイレはこれらの分析の中で何度か言及されており，例えば銀行型教育的な知識観が学習者の能動性を無視した常識の注入になっているなど，アップルのこれまでの知識社会学の分析視点と結び付けられて参照されている。また本論ではないが付論のインタビューの中で，フレイレについてまとまってアップルが語っている箇所がある。その中ではアップルがフレイレを非常に肯定的に評価しつつも，フレイレを無批判に「神」にしてはならないこと，支配的な教育内容をめぐる論点について意見を異にする部分があること，フレイレの理論は米国の文脈に合わせて再構成する必要があり，それをしないで用いることが最も反フレイレ的であることなどを語っている[30]。

初版が2001年，２版が06年に出された『右派の/正しい教育（*Educating the "Right" Way*）』の中でも，フレイレには言及しているが，とはいえこの著作そのものではあまり掘り下げられて言及されているとはいえない。むしろこの『右派の/正しい教育』に先立って発表されており，日本ではこれまであまり参照されていない99年の『権力，意味，アイデンティティ（*Power, Meaning, and Identity*）』の中で，１章分を割いて具体的にフレイレに言及している。以下でこの論考にみられるアップルのフレイレ受容を検討したい。

この著作の時点でフレイレは故人となっており，この論考はフレイレのレガシーをどのように受け継ぐかという論点から始まっている。この中でまずアップルは，フレイレ産業（Freire industry）と彼が呼ぶものと距離をおかなければならないと述べている。これはフレイレの著作の一部を，自らの研究の中で学術界での地位向上のために用いることを指している。アップルは，フレイレの遺した功績とは理論と実践の両面を同時に推し進めるという危険な仕事に従事したことであると考えている。フレイレの仕事は，抽象化や匿名化がされていない農民たちとのつながりに基づく具体的な実践とともにあった。これに対して「フレイレ産業」の一部は，フレイレの業績を学術界という安全な避難所へと戻しているとアップルはみる。すなわち彼らの仕事はフレイレの言葉や名前を用いてはいるものの，それはフレイレを学問的に対象化したものとなってしまっていて，彼ら自身がその学問的成果を通じて何らかの具体的な社会運動の一部に関与し，具体的な実践を行っているわけではないということである。

もちろんアップルは，批判的教育学における学術的貢献に意義がないと言っているわけではなく，粗悪なプラグマティストの立場を採用しているわけでもない。アップルが問題にしているのは，彼らが学術の場で書いていることと，学校や地域コミュニティ，組合などの「現実世界」での具体的な闘争とが結びつかないままに乖離していってしまうことであり，フレイレはこのようなあり方を決してよしとしなかったであろうとアップルは考えるのである。

この問題意識を示している章のタイトルが「フレイレ，ネオリベラリズム，教育（Freire, Neoliberalism, and Education）」となっていることからも分かるように，アップルはフレイレを保守復権への批判とそれに対するカウンター戦略を担うものとして位置づけており，彼の理論と実践から，保守復権が持つ市場化の側面の問題点が浮き彫りとなると考えている。具体的には，ネオリベラリズムが平等に「われわれはみな消費者」であるとする言説が脱政治化を伴っており，人々が歴史的な固有性を持つ存在であることや，ネオリベラリズムがコストの問題について言及する際には労働者階級が負わされている「コスト」の存在を無視していることを批判するのである。

また，階級の問題などに言及すると同時にアップルは，「どうすれば解放へと人を導くという傲慢な前提から逃れられるのか？」という，批判的教育学に対して向けられた批判への応答の問題も視野に入れている。この批判はつまり，教育者が解放の道筋を常に知っているものとする批判的教育学にしばしば無自覚にみられる前提に対するものであるとみられる。この問題に対するアップルの応答は，脱中心化された連帯・結合を重視することであった。その具体例として挙げられているのが，米国の教育者団体である「学校再考」(Rethinking Schools）および当該団体の出版

する同名の雑誌や，全米教育活動家連合（the National Coalition of Educational Activists）である。とりわけ雑誌『学校再考』は，そのものがフレイレに直接影響を受けているだけでなく，フレイレの仕事をさらに拡張させようとする教育者たちによって形作られている。これらの組織や団体は，批判的教育者や活動家，ラディカルな学者などが集まる場となっており，反人種差別や，ポストコロニアリズム，ラディカルな多文化主義，同性愛，様々な女性の声，環境問題など様々なイシューに関わる立場の人々が集まるフォーラムとなっている。

加えて，アメリカの大規模な専門家団体であるASCD(指導・カリキュラム開発組合，the Association for Supervision and Curriculum Development）とアップルの関わりは，志ある教師が「月曜からどうすればいいのか？」と問うことに対しての解答の一つとなっているとアップルは例示する。ASCDは広く初等中等教育に携わる教師や行政官たちが入る団体で一定の影響力があるものの，もともとは進歩的な教育団体ではなく，技術的で脱政治化された教材を提供していたという。このASCDのうちフレイレに共鳴する教師やそれに近い進歩的な立場の教師たちの実践を収めた実践集が，日本でも邦訳されている『デモクラティック・スクール（*Democratic Schools*）』である。この『デモクラティック・スクール』は全米に15万人いるとされるASCDの会員のみならず，同じような問題に直面している全米の教師たちの手にも渡った。こういった形で，理論やレトリックの水準にとどまらないネオリベラリズムへの対抗のための介入が必要であるとアップルは主張している。

そしてその際の原点として立ち返るべきところがフレイレであるとアップルは示唆する。これはフレイレが何らかの「答え」を示しているからでも，学者が高い評価を受けるためのストラテジーとしてでもない。保守復権という進歩主義教育にとっての苦難の時代において，社会に対するユートピア的な希望を持つ集団的記憶としてフレイレに立ち返るべきだとアップルは述べている[31)]。

アップルは他の２人と同様にフレイレと公私問わず対話をするなど深い関係を持っており，続く2013年の著書『教育は社会を変えられるか？（*Can Education Change Society?*）』の中でも在りし日のフレイレとの個人的なエピソードが語られている。この『教育は社会を変えられるか？』の中でアップルは，フレイレの存在を米国における社会変革を視野に入れた民主主義教育に携わった人々と並列して扱い，先の『権力，意味，アイデンティティ』に続いて１章分の分量を割いて検討している。アップルがその例として挙げているのが，ジョージ・カウンツ（George Counts）やハロルド・ラッグ（Harold Rugg）などのいわゆる社会改造主義の論者たちや，ハイランダー・フォークスクールの創設者として知られるマイルズ・ホートン（Myles Horton），社会学者で公民権運動を指導したW・E・B・デュボイス（W. E. B. Du Bois）であり，彼らと並ぶ形で「教育は社会を変えるために不可欠なものである」と考えた者の１人として，フレイレはその名が挙げられている。そして教育学研究において，カリキュラム理論に批判的に介入することは重要であるが，フレイレはそれを具体的な実践と同時に行っていたことは忘れてはならないとして，やはり実践への回帰を思い出させるものとして彼を位置づけている[32)]。

5　ピーター・マクラーレンのフレイレ受容

マクラーレンは３人の中で最も若く，初期はジルーとフレイレの両者に影響を受けている。マクラーレンは，フレイレが大きな影響を与えたクリティカル・ペダゴジーと関連する研究分野の中で自らが関わってきたものとして，ラテンアメリカの解放の神学，批判的リテラシー，知識社会学，教師教育，ポストモダニズム，カルチュラル・スタディーズ，多文化主義教育を挙げている[33)]。マーク・プライン（Marc Pruyn）の整理によると，マクラーレンの研究は1994年ごろを画期として，前期と後期に分けることが出来るという[34)]。前期のマクラーレンは『学校での暮らし』や『儀式的行為としての学校教育（*Schooling as a Ritual Performance*）』などの批判的エスノグラフィーに基づく，批判的研究が主な仕事であった。『学校での暮らし』は現在までに６版を重ねており，古い版ではフレイレを参照してはいるものの，実質的な言及はあまりない。『儀式的行為としての学校教育』でも同様である。マクラーレンの著作の中でフレイレが初めて実質的に言及されているのは，1993年にマクラーレンが編者を務めた『パウロ・フレイレ（*Paulo Freire*）』の中の２つの章である。当該論考は，共著の形を取っているため，どこまでがマクラーレンによるものなのかが定かではないが，フレイレと生徒の声の関わりについて論じており，階級のみならずジェンダーや人種など様々な差異を射程に入れて論じている[35)]。

フレイレについてマクラーレンが最も分量を割いて

論じているのは，2000年の著作『チェ・ゲバラ，パウロ・フレイレと革命の教育学（*Che Guevara, Paulo Freire, and the Pedagogy of Revolution*）』である。この著作では，キューバの革命家であるチェ・ゲバラ（Che Guevara）とフレイレについて，それぞれの生涯も含めて詳細にレビューがなされており，最後にマクラーレンが考える革命の教育学のビジョンが提示されている。後期のマクラーレンは，自らの立場をマルクス主義的ヒューマニズムと位置づけ，80年代以降の米国の市場化（市場の規制緩和）やネオリベラリズムが蔓延する状況に対抗する方向に舵を切っている。その際にマクラーレンが痛烈に批判する対象がグローバル資本主義である。

マクラーレンはこの著作の中で，フレイレの生涯を振り返るとともに，北米の批判的教育学に与えた影響を示している。マクラーレンはフレイレの与えた影響の中で最も重要なものは，社会に対してユートピアを描くことと希望を持つことであると考えている。この点は表現の仕方こそ異なるが，ジルーやアップルとも共通する評価であるといえよう。マクラーレンは，フレイレが大きな政治的問題である社会的公正（social justice）だけでなく，多様性や自己肯定に対しても関心を向けていたことや，フレイレが物質的資源の再分配の問題だけではなく，文化的意味（cultural meaning）の水準でも闘争をしていたことなどにも触れている。そのうえで，フレイレの支持者たちが彼の理論のうち，自分が利用したいと考えている一部の側面だけを脱文脈化して利用していることを批判している。例えば，進歩的教育主義者はヒューマニズムの部分だけ，マルキストとネオマルキストはプラクシスと彼の歴史だけ，左派リベラルはユートピアニズムだけといった具合である。これに対してマクラーレンは，後期作品も含めたフレイレ全体を読み，捉えることが必要であると指摘している。

さらにマクラーレンはフレイレ教育学の理論的な弱点についても触れており，そもそもフレイレが自身の理論をそれぞれの教育者がローカルな闘争に合わせて再発明（reinvent）することを願っていたということをふまえたうえで，その擁護を行っている。例えばフレイレをユートピアな社会観だとして批判する者もいるが，マクラーレンは彼の識字教育運動が実際に成功を収めたことをもって，空理空論ではないと反批判している。また，キャスリーン・ワイラーらが指摘するような，フレイレの解放モデルが持つ問題や，白人男性の特権性の問題への取り組みの欠如などについてはその批判の正当性を肯定し，フレイレが十分に理論化することが出来なかった点として認めている。が，それと同時に晩年のフレイレが人種やジェンダーの問題にふれるようになったことについても示し，擁護している。そしてこれらの理論的限界の存在を認めつつも，黒人のフェミニストであるベル・フックス（bell hooks）などが肯定的に彼を評価していることを引きながら，彼の理論と実践が依然として持つ意義を押し出している[36]。

さて，ここまでのフレイレに対するマクラーレンの解釈は他の論者と重なる部分も大きく，かなり丁寧にフレイレ全体を捉えているといえる。特に前期だけでないフレイレの思想全体を捉えて論じることの必要性はジルーやアップルがあまり指摘していないポイントである。しかしそのうえでマクラーレンがフレイレを評価する点は他の２人と決定的に異なる。マクラーレンはフレイレをあくまでマルクス主義者として見るのである。マクラーレンは，様々な差異があること，そしてその差異をフレイレが認識するようになっていったことを踏まえつつも，自身が対抗しようとしているグローバル資本主義との闘争を念頭に階級の問題をとりわけ強調する。

例えば，人々は人種やジェンダーなどの諸差異を，階級関係を通すことで生きており，同時に階級関係を諸差異を通じて生きているとマクラーレンはいう[37]。そしてジェンダーや人種の問題は社会的生産関係の全体によって形作られているという。このように，階級を諸差異とは切り離し，それと並列するものとしてマクラーレンは扱っており，そのうえでフレイレの思想が資本主義世界の急激な変革を夢見る革命的なものであるという面を肯定的に紹介している。マクラーレンのフレイレ解釈そのものは晩年の諸差異の認識を適切に汲み取りながらも，彼自身のフレイレ評価はそれとは別に，グローバル資本主義との敵対に重きが置かれていることが見てとれる。

6　おわりに―３人のフレイレ受容のまとめと可能性，今後の課題

前節までで批判的教育学の代表的な論者３人のフレイレ受容について，限られた紙幅ではあるが概観した。以下で３人のフレイレ受容をもう一度整理したうえで，簡単な考察を加えたい。

まずジルーは，フレイレが「批判の言語」と「可能性の言語」の両方を提供したことを，自身の教授学構

想の基礎においている。また，生徒の声の理論や対話など，具体的な教室での実践の際の教育者の姿勢・カリキュラムのあり方の点でも，フレイレの影響が強い。ただし，ジルーはフレイレをそのまま受容したわけではなく，北米の現実に合わせる形で再構成を行っており，フレイレに寄せられた批判も乗り越えようとしていた。また，自身の境界教育学の枠組みの中で，フレイレが越境者の１つのモデルとして捉えられていることを示した。ただし，2000年代以降はジルー自身が教育学そのものを論じることが少なくなったこともあり，ほとんどフレイレへの言及がみられない。

次にアップルであるが，キャリアの始まりがかなり早いことや，研究の方向性が異なることもあってか，ジルーと比べるとフレイレの影響は初期において限定的である。フレイレとの交流そのものは生前からあったが，フレイレについて文献の上でまとまった言及が見られるのは彼が亡くなってからである。特に近年の著作で顕著に言及が増えており，その背景には米国に蔓延するネオリベラリズムという現代的なイシューへの対抗的な社会運動をする際に，教育を社会運動・政治運動の場とした人物としてフレイレを念頭に置いていると考えられる。アップルは特にフレイレが実践に関わり続けてきたことを重くみており，学者同士を相手にした理論的な仕事だけではなく，具体的な社会運動への関与も同時に行うことこそがフレイレの遺産であると考えているとみられる。近年はこのフレイレのスタンスにアップル自身も近づいているといえるだろう。実践的な戦略としては，草の根的で脱中心的な連帯を支持している。

最後にマクラーレンは，３人の中で最もフレイレそのものに多く言及し，詳細まで検討しており，晩年のフレイレの思想の変化までを丁寧に踏まえている。ただし自身がフレイレを受容する過程においては，グローバル資本主義を危険視し，マルクス主義的な階級闘争を重視するマクラーレン自身の視点にかなり引き寄せられている。フレイレの理論の中でもマクラーレンは，リベラルなブルジョワ改革を否定し，社会主義社会の樹立を目指す自身の考えを補強する部分を参照し，フレイレの階級への意識を強調していた。

以上を踏まえて，以下では３人のフレイレ受容の共通点と相違点，そしてこれらの異なるフレイレ解釈がもたらす可能性と課題のバリエーションを示して結びたい。まず第１に３人に共通する点として挙げられるのは，フレイレのユートピア的社会観を肯定していたところである。その受容のあり方や表現はやはり異なるが，悲観論や宿命論に陥ることなく，より良い社会に向けて教育を通じて働きかけていくことを肯定的に捉える基礎となっていた。もう１点共通していたのは，フレイレを称賛しながらも，自分の論に都合の良い部分だけを用いたり曲解したりすることで，本来のフレイレとはかなり異なる形でフレイレを用いることに対する批判である。ただし３人がフレイレにおいて重視する部分が異なるため，それぞれが異なる批判を行っていることには注意が必要である。他方で，フレイレが自身の理論や実践を再発明することを肯定している点も３人全員が了解しているものの，やはりその再発明や解釈の方向性は三者三様であり，ここに３人の立ち位置の違いが現れていた。

まずジルーのフレイレ解釈は，境界教育学理論の構築に影響を与えており，批判的研究が学校を告発して終わるのではなく，学校を対話に基づく公共領域として再定義することで批判的研究の系譜に風穴を開けたといえる。他方で，フレイレがかなり実践者にもイメージをつかみやすい理論を示していたことに比べると，シングルイシューではなく様々な差異を横断する教育者・学習者の姿は具体的に見えてきづらい。越境者たる変革的知識人は理論だけを見れば教師にとって非常にハードルが高そうであるが，変革的知識人には教師に限らず学習者やその他の文化労働者も含まれることを考慮すれば，実際には日常のシングルイシューの分担から始まり広がっていくのではないだろうか。変革的知識人像と実際の教師の日々の闘争との架橋が今後の課題として期待されるだろう。

次にアップルのフレイレ解釈は，フレイレの意義を理論と実践の両輪で常に活動したことにみる。教育学者であるアップルにとっての「実践」は，ネオリベラリズムに対する対抗的な社会運動である。このアップルの社会運動の姿勢には，彼の教師に対する信頼と尊敬が見て取れるように思われる[38]。アップルの脱中心的な連帯は，それぞれの教師の日々の取り組みを尊重するため，それぞれが奮闘することで様々な差異の問題を解決する糸口として捉えうるだろう。アップルの示す戦略は３人の中では最も具体的であり，現場の教師たちにとっても明快で実践を構想しやすいものである。今後はとりわけフレイレの元々の識字教育実践がそうであったように，学習者の生活経験やアイデンティティとつながる学びをどのように教師が実現させているかを，様々な具体的な実践に基づいて明らかにしていくことが必要とされる。また，アップルは社会運動の場を学校に限定しているわけではなく，地域コ

ミュニティや組合なども視野に入れている。したがって，これらの場における日常と教育と政治が交差する様相を微視的に検討することも意義が認められるだろう。

最後にマクラーレンのフレイレ解釈は，フレイレそのものを晩年まで含めて最も全体的に捉えているが，マクラーレンの意識はグローバル資本主義への対抗のための階級闘争に重きが置かれている。元来のフレイレが階級の問題を非常に重視していたことは間違いないであろうし，マクラーレンが危機感を持つようにグローバル資本主義が人々の生活を切り崩している側面は確かに存在感を増している。とはいえ，グローバル資本主義との闘争のためもっぱら階級のみに着目するのは，マクラーレン自身が把握して示しているように晩年のフレイレがジェンダーや人種，階級ですべてが決まるわけではないと考えていたことを踏まえれば，やはり望ましい戦略とは言いがたい。また，日々子どもと接している教師たちがみな労働者革命を志向するというのも現実的ではない。これはアップルの課題とも重なるだろうが，グローバル資本主義に対抗するといったときに，現に生活に溶け込んでいる市場とどのように批判的教育学が向き合っていくのか，そのスタンスをより緻密に打ち出していくことが求められるだろう。

今後の課題としては，現時点で最も具体性のある戦略を示すアップルの路線を念頭に，フレイレの思想を受容した草の根の実践の意義を詳細に検討していくことが喫緊の課題である。その場はアップルが述べるように，学校にとどまらず地域コミュニティや組合なども視野に入れることができ，例えばスコットランドにはフレイレにかなり強く影響を受けた地域コミュニティでの成人教育が存在しており，特に検討を要するといえよう[39]。

註

1）澤田稔「批判的教育学から見たグローバル化をめぐるカリキュラム・教育方法のポリティクス—後期近代におけるマイノリティ教育の論理—」『教育社会学研究』第98集，日本教育社会学会，2016年５月，31–33頁

2）以上の彼の略歴については，Roberts, P., *Education, Literacy, and Humanization: Exploring the Work of Paulo Freire*, WestPort: Bergin & Garvey, 2000, pp. 3–6を参照した。

3）パウロ・フレイレ『希望の教育学』里見実訳，太郎次郎社，2001年，里見実『パウロ・フレイレ「被抑圧者の教育学」を読む』太郎次郎社エディタス，2010年など。

4）松岡靖「アメリカの批判的教育理論によるP.フレイレの『対話のペダゴジー』の受容—H.ジルーの批判教授学を中心に—」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要教育科学』第47巻第２号，2001年，43–53頁

5）竹川慎哉「ジルーの境界教育学におけるフレイレ理論の再構成—リテラシー形成における差異の位置づけを中心に—」『アメリカ教育学会紀要』第15号，アメリカ教育学会，2004年，3–11頁

6）拙稿「ヤコブ・ニューマンのクリティカル・ペダゴジー論—ヘンリー・ジルーとの比較を通して—」『カリキュラム研究』第27号，日本カリキュラム学会，2018年，3–4頁

7）澤田稔「アメリカ合衆国における批判的教育研究の諸相（1）:ヘンリー・ジルーの教育論に関する批判的再検討（上）」『名古屋女子大学紀要人文・社会編』第54号，2008年，57–70頁，澤田稔「アメリカ合衆国における批判的教育研究の諸相（1）:ヘンリー・ジルーの教育論に関する批判的再検討（下）」『名古屋女子大学紀要人文・社会編』第54号，2008年，71–80頁，澤田稔「アメリカ合衆国における批判的教育研究の諸相（2）:マイケル・アップルの教育論に関する予備的考察（上）」『名古屋女子大学紀要人文・社会編』第55号，2009年，59–72頁

8）安彦忠彦・澤田稔「批判的カリキュラム研究における初期マイケル・アップルの位置」『名古屋大学教育学部紀要教育学』第46巻第２号，2000年，145–158頁

9）ジルーの経歴については，ヘンリー・ジルー公式Webサイト「Dr. Henry A. Giroux」(http://www.henryagiroux.com/about，2019年９月17日情報取得）を参考にした。

10）国内のジルーの研究の展開については，拙稿「ヤコブ・ニューマンのクリティカル・ペダゴジー論—ヘンリー・ジルーとの比較を通して—」前掲，1–3頁を参照されたい。

11）マイケル W. アップル『オフィシャル・ノレッジ批判—保守復権の時代における民主主義教育—』野崎与志子・井口博充・小暮修三・池田寛訳，東信堂，2007年，付論インタビューによる

12）マクラーレンの経歴については，チャップマン大学のマクラーレンの紹介ページ（https://www.chapman.edu/our-faculty/peter-mclaren，2019年９月29日情報取得）を参考にした

13）田中智志「クリティカル・ペダゴジーの批判問題」『近代教育フォーラム』第8号，教育思想史学会，1999年，205–212頁

14）Bowles, S. and Gintis, H., *Schooling and Capitalist America*, New York: Basic Books, 1976

15）Giroux, H.A., *Ideology, Culture and the Process of Schooling*, London: The Falmer Press, 1981

16）Aronowitz, S. and Giroux, H. A., *Education under siege: the conservative, liberal and radical debate over schooling*, London: Routledge & Kegan Paul, 1987

17）Giroux, H. A., *Teachers as Intellectuals: Toward a Critical Pedagogy of Learning*, Granby: Bergin & Garvey Publisher, p. 108

18）Giroux, H. A.,*Teachers as Intellectuals: Toward a Critical Pedagogy of Learning*, op. cit., p. 111

19）竹川慎哉『批判的リテラシーの教育—オーストラリア・アメリカにおける現実と課題』明石書店，2010年，81–83頁

20）Ellsworth, E., “Why Doesn’t This Feel Empowering?: Working Through the Repressive Myths of Critical Pedagogy”, *Harvard Educational Review*, Vol. 59, No. 3, 1989, pp. 297–325

21）Giroux, H. A., *Border Crossings: cultural workers and the*

politics of education, 2nd ed., New York: Routledge, 2005

22）Ibid., pp. 187–207

23）Giroux, H. A., *Disturbing Pleasures : Learning Popular Culture,* New York: Routledge, 1994, pp. 141–152

24）唯一の例外が，Giroux, H. A., "Paulo Freire and the Pedagogy of Bearing Witness", *Education and the Crisis of Public Values,* 2nd ed., 2015, Chap. 8（pp. 116–124）である。初出は初版の2012年で，フレイレへまとまった言及を行っているものとしては最も新しいものであるが，それまでの著作と比較した時に目新しい論点はない。

25）Apple, M. W., *Ideology and Curriculum*, 3rd ed., New York: Routledge, 2004

26）Apple, M. W., *Education and Power*, 2nd ed., New York: Routledge, 2012

27）ここまでの整理は，マイケル・アップル『オフィシャル・ノレッジ批判―保守復権の時代における民主主義教育―』野崎与志子ほか翻訳，東信堂，2007年，257–261頁の訳者解説も参考にしている

28）ただし，2004年に出版された『イデオロギーとカリキュラム』の第３版では，初版刊行から25周年を記念したはしがきにおいてフレイレにごくわずかではあるが触れられている。『教育と権力』も2012年に新装版を出しているが，こちらは1995年刊行の２版を基にしており，フレイレへの言及はない。

29）Apple, M. W., *Teachers and Texts: A Political Economy of Class & Gender Relations in Edu-cation*, New York: Routledge, 1986, p. 179

30）マイケル W. アップル『オフィシャル・ノレッジ批判－保守復権の時代における民主主義教育－』前掲

31）Apple, M. W., *Power, Meaning, and Identity: Essays in Critical Educational Studies*, 2nd Revised, New York: Peter Lang, 1999, pp. 197–220

32）Apple, M. W., *Can Education Change Society?*, New York: Routledge, 2013

33）McLaren, P., *Che Guevara, Paulo Freire, and the Pedagogy of Revolution*, Lanham: Rowman & Littlefield Publishers, 2000

34）Pruyn, M. and Huerta-Charles, L. M., *Teaching Peter McLaren: Paths of Dissent*, New York: Peter Lang, 2005

35）McLaren, P. and Leonard, P.(eds.), *Paulo Freire: A Critical Encounter*, New York: Routledge, 1993

36）McLaren, P., *Che Guevara, Paulo Freire, and the Pedagogy of Revolution*, op.cit.

37）Ibid.

38）例えば『教育は社会を変えられるか？』の中では，フレイレがサンパウロで教育長官をしていた頃にブラジルを訪問した際，彼の政策には理解を示しつつも，教育省の方針に教師たちを従わせようとするやり方が，日々困難に直面している現場の教師に対する敬意を欠いているのではないかと面と向かって批判したことが記されている。

39）Kirkwood, G. and Kirkwood, C., *Living Adult Education : Freire in Scotland*, 2nd ed., Rotter-dam: Sense Publishers, 2011

（指導教員　澤田稔客員教授）